

タイマヒドン大学熱帯医学研修

松村 武史 中村 哲也 岩本 愛吉  
東京大学 医科学研究所 感染免疫内科

タイのマヒドン大学のDTM&H (Diploma of Tropical Medicine & Hygiene) コースは6ヶ月間の臨床熱帯医学コースである。コースの目的は、疫学、経済学、倫理学、病理学、形態学、栄養学、症候学などを含め、熱帯地域の健康問題や疾患の知識の獲得と、さらに、それらに対する治療、予防、コントロールなど、取り組み方に精通した医師を育成することである。参加資格は医師免許を所持かつ1年以上の臨床経験があることである。本年はタイ出身者6名を含む、18カ国から32人の医師が参加した。参加者の多くはアジア、特にタイ近隣諸国の医師である。前半4ヶ月は必須科目を受講し、後半2ヶ月は臨床、基礎コースに分かれ選択科目を受講する。必須科目では幅広く熱帯医学を勉強し、タイで多い感染症（マラリア、デング出血熱、タイ肝吸虫、有棘顎口虫など）については特に詳しく学習する。講義はFood-borne diseasesやVector-borne diseasesなど系統別に関講され、それぞれに疫学、形態学、免疫学、病理学、症候学、診断学、治療学、予防・コントロール学などが講義される。形態学や診断学では、顕微鏡実習や免疫学的検査の見学などが体験できる。症候学、治療学では大学の敷地内にある付属病院の病棟見学も数多く行われる。タイ人の6人の医師は付属病院の2年目の医師であり、病歴や治療などを説明し、学生と患者とのコミュニケーションを助ける。6月と7月に2度のフィールドトリップがあり、マラリア流行地域へ行き、地域住民の検診や便・血液の検査を行うとともに、蚊の生態調査やノミやダニの採取方法を実習する。このコースの特徴は、マヒドン大学付属熱帯医学病院が多くの熱帯病患者を集め大規模な研究をしていることと、参加者全員が医師であるということである。マヒドン大学付属熱帯医学病院は地方のクリニックと提携し、多くの熱帯病患者を受け入れている。そのため、講義のすぐ後に患者を見学でき、多剤耐性マラリアの臨床治験や耐性機序に関する基礎的研究などについても学習できる。また、全員が医師のため、基本的な内容の講義はグループワークで行われることが多く、各国からの参加者と意見を交換することにより、交流を深め、他国の医療事情も知ることができる。DTM&Hコースはこれから熱帯医学を勉強する臨床医向きのコースであると言える。

---

The clinical course in tropical medicine at Mahidol University in Thailand  
TAKESHI MATSUMURA  
Division of Infectious Diseases and Immunology, Institution of Medical Science,  
Tokyo University